



最近、『伝習録』を読んでいます。『伝習録』とは、陽明学で名をはせた王陽明と、その門下との間で交わされた問答や逸話についてまとめたもので、陽明学を学ぶ際のテキストのひとつとされています。

私が『伝習録』を読み始めた理由は、内村鑑三の『代表的日本人』の邦訳を読み、中江藤樹に興味を持ったからです。中江藤樹は「近江聖人」と称され、滋賀（特に湖西）にお住まいの方ならば知らない人はいないというほど高名な方です。中江藤樹の偉業の一端を少し取り上げてみましょう。

（師を求めて諸国を遍歴していた青年が、ある晩に近江（滋賀）の田舎宿に一泊した時のこと、隣室から2人の侍の話が聞こえてきます…）

「主君の命で首府に上り、数百両の金を託されて帰る途中だった。肌身離さず金を所持していたのだが、この村に入った日のこと、日頃の習慣に反して、財布をその日の午後に雇った馬の鞍に結びつけておいた。宿に着き、鞍につけた大事なものを忘れたまま、馬子と一緒にその馬を返してしまった。しばらくして、はじめて大変な忘れものをしたことに気づいた。私がどれほど困ったか、おわかりいただけるであろう。馬子の名は知らず、捜し出すのは不可能だった。たとえ捜し出せたとしても、その男が、すでに金を使い尽くしていたら、どうなる。私の不注意は弁解の余地がない。主君に詫びて許される道はただ一つしかない。（人命は当時尊いものではなかったのです。）私は手紙を、一通は家老にあて他は親族にあててしたため、最期を迎える決意をかためたのである。

この言いようのない苦悩におちいっていたときのことである。真夜中遅くになって、だれか宿の戸を激しく叩く者があった。やがて、人夫の身なりをした男が、私に面会を求めていることを知らされた。その男を見るや、たいへん驚いた。男は、その日の午後、馬に私を乗せた馬子本人であったのだ。男はすぐさま言った。

「おサムライさん、鞍に大事なものを忘れていませんか。家に帰るなり見つけて、お返ししようと戻ってまいりました。これでございます」

そういう馬子は私の前に財布を置いた。私は自分がどこにいるやらわからぬほどだった。嬉しさのあまり我を忘れた。しかし我に返って告げた。

「あなたは私の命の恩人である。命の助かった代償として、この四分の一の金を受け取られたい。命の親とってよい」

しかし馬子は聞き入れなかった。

「私はさようなものを受け取る資格がございません。財布はあなたのものです。あなたが持っているらっしゃって当然なのです」

馬子はそう言って自分の前に置かれた金にふれようとしなかった。私はその男にぜひとも十五両受け取らせようとした。しかし駄目だった。五両、二両、最後には一両を渡そうとしたが無駄だった。ついに馬子は言った。

「私は貧乏人です。このことで家から四里（一〇マイル）の道をやって来たので、わらじ代として四文（一セントの百分の四）だけ、お願いすることにしましょう」

なんとかして私とその男に渡すことのできた金は、二百文（二セント）だった。男が喜んで立ち去ろうとするのを、私は引きとめてたずねた。

「どうして、それほど無欲で正直で誠実なのか、どうか、そのわけを聞かせてほしい。このご時世に、これほどの正直者に出会うとは思ってもよらなかった」

貧しい男は答えた・

「私のところの小川村に、中江藤樹という人が住んでいまして、私どもにそういうことを教えて下さっているのです。先生は、利益をあげることだけが人生の目的ではない。それは、正直で、正しい道、人の道に従うことである、とおっしゃいます。私ども村人一同、先生について、その教えに従って暮らしているだけでございます」

（内村鑑三著，鈴木範久訳『代表的日本人』岩波文庫，2010年第33刷より一部改変）

こういった話は、倫理や道德の学習の供に應ずるためだけのものではないと考えます。『伝習録』には、学習と実践について次の様に言います。

「門人座に在りて、動止の甚^{はなは}だ矜持^{きょうじ}せる者有り。先生曰く、人若^もし矜持すること太^{あまり}に過ぎれば、終^{つい}に是れ弊有らんと。曰く、矜持すること太りに過ぐれば、如何^{いかん}ぞ弊有るか。曰く、人は只だ許多^{きよた}の精神有るのみ。若し専ら容貌の上^{うへ}に在りて功を用うれば、則ち中心に於て照管し及ばざる者多しと。太りに直率^{ちよくそつ}なる者有り。先生曰く、如今此の学を講^{きわ}むるに、却^{かえ}って外面は全く検束せざるは、又た心と事とを分かちて二と為せりと。」

訳：同席していた門人のなかに、立居振舞があまりに荘重な人がいた。先生がいわれた。「あまりにも荘重すぎると、弊害を生ずる結果になるよ」と。黄直がいった、「あまりにも荘重に過ぎると、どうして弊害が生じるのですか」と。先生がいわれた、「活力の旺盛な人ならともかくも、おおかたは、もし姿・形ばかりに関心をはらったならば、肝腎のことに注意をふりむけることができないさ」と。門人の中にはこれと反対に、あまりにも率直で無頓着な人がいた。先生がいわれた、「いま、この学問を研鑽しているのに、表面を全くひきしめないのは、人格と行為とを別々のこととみなしている人だね」と。

（吉田公平『伝習録～「陽明学の真髓」～』タチバナ教養文庫，2001。訳は吉田による）

『伝習録』の言葉は、如何様にも読み取れます。私は、これを射と体配の関係と考え、指導する者・仰ぐ者の心構えとも考え、また、表面的な問題に眼を奪われがちな自分自身への戒めにもなると考えています。

とかく、舶来モノは優れているという風潮が未だにあちこちに残っているように感じますが、ほんの数百年前の東アジアには舶来モノに負けないような「考え方」がしっかりと存在しており、今も、色褪せず現代人の頭を悩ませてくれることに感心してしまいます。